

# 長崎県におけるインフルエンザの疫学調査(2004年度)

吉川 亮・中村 まき子・平野 学・原 健志・益田 宣弘

## Epidemic of Influenza in Nagasaki Prefecture(2004)

Akira YOSHIKAWA, Makiko NAKAMURA, Manabu HIRANO, Kenshi HARA  
And Nobuhiro MASUDA

Key word: Influenza, Epidemic, Nagasaki Prefecture

キーワード: インフルエンザ, 流行, 長崎県

### はじめに

インフルエンザは、インフルエンザウイルスA型、B型及びC型のウイルスが鼻咽頭粘膜に感染増殖した結果生じる呼吸器系感染症である。A型は流行をおこしやすい、特に世界的な大流行の原因となる。B型はA型と同じく、流行を起こしやすいが、その流行の範囲は地域的あるいはそれ以上の広範なものが多い。C型は、散发例の原因としてよく知られ、流行を起こしてもきわめて限局的な範囲に留まることが多い。<sup>1)</sup>

今年度もこれまでと同様、厚生労働省の感染症流行予測事業に併せて、本県におけるインフルエンザ流行予測調査の一環として、流行状況を把握する目的で疫学調査を実施したので、その状況を報告する。

### 調査方法

#### 1. 流行予測感染源調査

##### 1) 散发事例

インフルエンザ流行予測調査の一環として、2004年11月～2005年4月の期間において長崎市内の内科医療機関の2定点で採取されたインフルエンザ様疾患患者の咽頭ぬぐい液、及び感染症発生動向調査事業の一環として、県内の小児科医療機関11定点等から採取された咽頭ぬぐい液について、ウイルス分離を実施した。

##### 2) 集団発生事例

学校施設等におけるインフルエンザが原因と疑われる集団事例のうち、県内各保健所管内の初発事例について、有症者のうがい水を採取し、ウイルス分離を実施した。

#### 2. ウイルス分離の方法

既報<sup>2)</sup>に従って実施した。

#### 3. 分離したウイルス株の同定

##### 1) 赤血球凝集抑制(以下「HI」と略す)試験

国立感染症研究所(以下「感染研」と略す)より分与された2004/2005シーズン用インフルエンザウイルス同定キットを用いてHI試験を実施した。

Aソ連(H1N1)型(以下「Aソ連」と略す)

・A/Moscow/13/98 (フェレット感染血清)

・A/New Caledonia/20/99 (フェレット感染血清)

A香港(H3N2)型(以下「A香港」と略す)

・A/Wyoming/03/2003 (フェレット感染血清)

B型

・B/Brisbane/32/2002 (羊高度免疫血清)

・B/Johannesburug/5/99 (羊高度免疫血清)

また、HI試験に使用した血球は、0.75%モルモット血球浮遊液を用いた。

表 1 2004/2005 シーズン月別検体数及びウイルス分離状況 (ウイルス分離数/検体数)

	11月	12月	1月	2月	3月	4月	合計
長崎市	0/2	0/1	11/21	27/53	12/23	6/6	56/106
佐世保市			2/2	0/8		1/1	3/11
県央地区				0/10			0/10
県南地区			13/13	8/10			21/23
対馬地区				2/10			2/10
合計	0/2	0/1	26/36	37/91	12/23	7/7	82/160

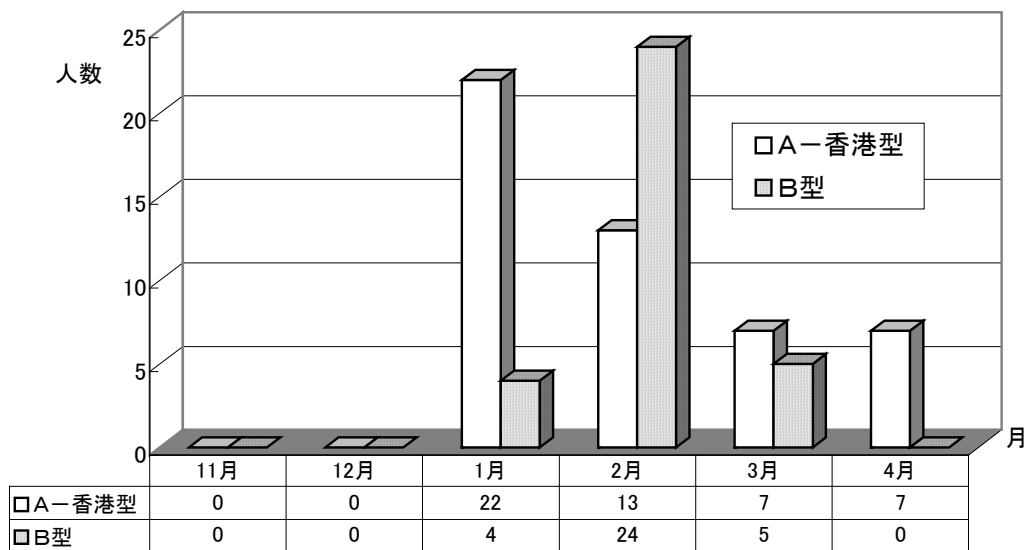


図 1 県内のウイルス分離状況 (2004/2005 シーズン)

表 2 集団発生施設における検査成績 (2004/2005 シーズン)

施設名	発生日	分離数/検体数	血清型
諫早市：北諫早中学校	2005/2/8	0/10	—
長崎市：横尾小学校	2005/2/8	1/5	B型
佐世保市：桜の聖母幼稚園	2005/2/22	0/8	—
対馬市：大調小学校	2005/2/28	2/10	B型

結果及び考察

表 1 に散発事例及び集団発生事例を合わせた検査検体数及びウイルス分離成績を、図 1 に県内のウイルスの分離状況 (2004/2005 シーズン) を示した。

2004/2005 シーズンにインフルエンザウイルスが最初に分離されたのは、2005 年 1 月 21 日に佐世保市内の

医療機関を受診した患者から分離された B 型ウイルスであった。また、翌 1 月 22 日に同医療機関を受診した患者から A 香港型ウイルスも分離された。

インフルエンザ様疾患の疑いで搬入された検体は 160 検体で、そのうち A 香港型 49 株、B 型 33 株が分離された (分離率 51.3%)。

本県における 2004/2005 シーズンの流行は、図1に示すように1月をピークに4月まで流行が継続したA香港型と2月をピークとしたB型の2種類の混合型と推察された。3月には検体数も減少し、主流行は2月でほぼ終息したと推測された。

表2に2004/2005シーズンの県内の学校施設等における集団発生事例の検査成績を示した。

本県では、2月初旬から2月末にかけて集団発生の初発例が報告され、分離されたインフルエンザウイルスがB型のみであったこととB型が2月に流行のピークを迎えていることから本県の集団発生事例は、B型によるものと推察される。また、例年に比べ非常に分離率の低い結果(3/33;9.1%)となったが、これは抗ウイルス薬投与後の患者から検体採取を行うなど採取した検体に原因があったと推察された。

#### ま と め

1. 2004/2005 シーズン中に、インフルエンザ様疾患の疑いで当所に搬入された検体は 160 検体で、それらの検体からA香港型 49 株、B型 33 株が分離された。集団発生事例は4施設(33検体)を検査し、B型が3名から分離された。
2. 本県でのインフルエンザの流行は、ウイルスの分離比が、A香港型 59.8%、B型 40.2%で2種類のウイルスの混合型であった。集団発生事例はB型によるものと推察された。

#### 参 考 文 献

- 1) 特集インフルエンザ: 第55巻, 1997, 日本臨床,
- 2) 原 健志: 長崎県におけるインフルエンザ疫学調査(2000年度)、長崎県衛生公害研究所報、46、110～114(2000)